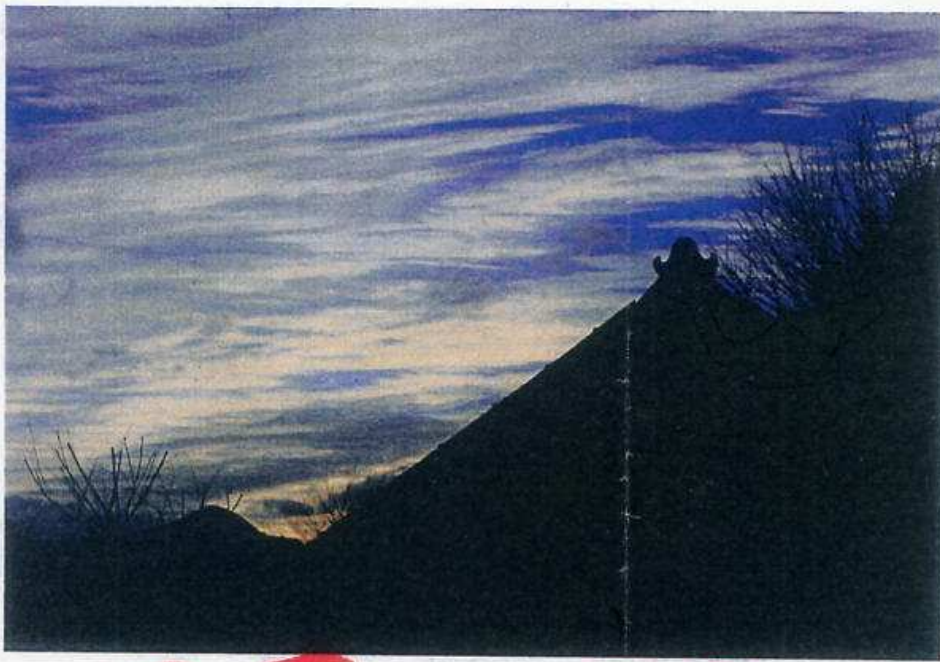


てんざい新聞

77. I. No. 235
 発行所 市岡日出夫
 責任者 市岡日出夫
 0883-88-5292



2017 NEW YEAR

新しい年が、静かに、穏やかにその扉が開かれ、はじまりました。
 毎年、雪の甲での新年を迎えるのにも、今年ほど、高い山が白くだけ、雪かきの作業をする事もなく、のんびりできます。
 天気予報では「晴れ」。今年こそ、来光を、と朝三時羊に起き、コーヒーを入れた家を出る。出合う車もなし、風もさみえず、登山口に到着。途中、道路が少し氷ついている。なると滑る。
 五時少し前に歩きはじめ、十二日に二回程、少し雪が降り、少し残っている。

穏やかに はじまる

通過していくが、熱くなった身体に心地よい。六時すぎると山々の屋根が浮かび、東の空は色づきはじめとなる。
 木々の中を急坂を登り抜けると周りが見えなくなる。何んと美しい絶景。雪海の中に山々が顔を出している。そこへ東は、紅く染りはじめ、ワクワク、ドキドキ、数枚のジャケットを切り、歩きはじめ。コメツツが、氷で輝く。クマガサの霜がキラキラと光り、まるでイルミネーション。そこへ、峠に出ると七時頃。そこへ、来光だ。北側の雪海が素晴らしい。
 ジャケットを切りながら、この時を待つ。風は少し強いが、はなのその。

る登山道。ま、暗い中、何の音もなく、自分の足音を響かすように足を運ぶ。三分位で汗をかきはじめ、一枚ぬいで、少しノドをうるおし、歩く、と一時間ほど見上げると星が輝いている。そして、祖谷の里を見ると、ポツリポツリと灯が、そして風の音が耳を



風の音だけが、少し下の方で、何の鳥かまいあがる。満足感、いついぞ下山をはじめると、近くで鹿の鳴き声、小鳥のさえずりも聞こえてきた。
 雪が少し残る一面には動物の足跡とが右に左にと見えてくる。
 と、鈴の音が聞こえ、だかなくと、団子を見ていると、下から一人の男性があがってきた。なると話して別れる。今年のはじめの出会い、は、予備から来た登山者。
 こんな新年のはじめですが、写真はこの次に、なりそうです。
 今年もここに新年ようしくお願ひします。

ゆらゆらと顔を出しはじめる太陽。見る間に大きくなる。どうして急に動きが早くなるんだろう。
 あつという声に光り輝き出し、振り向くと、屋根が赤々と輝きはじめ、ここぞしか見れない景色が広がる。
 陽光に身体をつつんと照らして、いながら頂上へ向う。
 頂上は、三六〇度のパノラマ。たゞ風が強く、少し下った岩場が、持つて来たコーヒーを飲む。うまい！
 たった一人で、こゝ来光の光につつまれて、飲むコーヒーはほんとおいしい。二杯目には、クッキーも食べ、くばり景色を眺める。